

# 知的障害児の書字における筆圧が 文字に及ぼす影響の一考察

～書きやすさを目指して～

キーワード：知的障害、特別支援教育、協調運動、筆圧、文字、書字学習

## I. 本実践研究の背景と目的

学校教育において、書字は特定の教科のみならず学習全般にわたって必要とされる基盤的な技能であり、日常生活を営む上でも欠かすことのできないものである。しかしながら、中には書字学習のつまずき、その後の学習全般にわたって困難を示す児童も少なからず存在している(大庭・佐々木.1990、大庭.1996a)。書字の困難に関して、近年、国外では運動面との関連が指摘されている(東・石倉.2021)。本校に在籍する生徒の中にも手指の微細運動のコントロールが未熟なため、適切な筆圧を維持することが困難となり、筆圧が強すぎると紙が破れたり文字が滲んだりしている。反面、筆圧が弱すぎると文字が薄くかすれてしまい、書いた本人や他者が内容を認識しにくくなるといった視認性の低下につながることも考えられる。本研究では書字に必要な要素の中でも筆圧に焦点をあてる。生徒の書字に関するアセスメントを行い、筆圧が書字にどのような影響を及ぼし、「書きにくさ」とは具体的にどのような姿であるのかを調査する。

### 書字における筆圧の調整

#### 身体機能

- ・過緊張の緩和
- ・安定した姿勢の保持
- ・力の分散

#### 教材環境

- ・硬筆
- ・原稿用紙
- ・机や椅子

「書きにくさ」から「書きやすさ」へ

## II. 研究方法

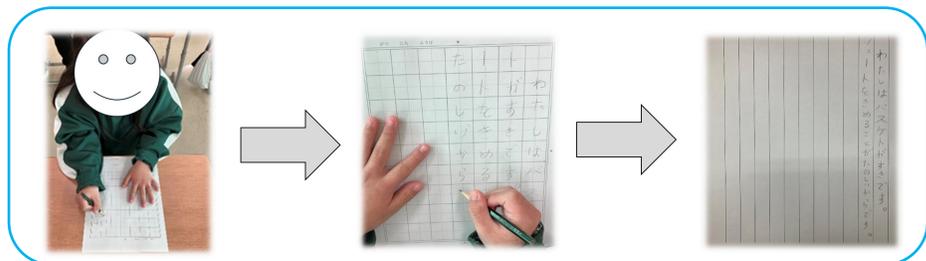
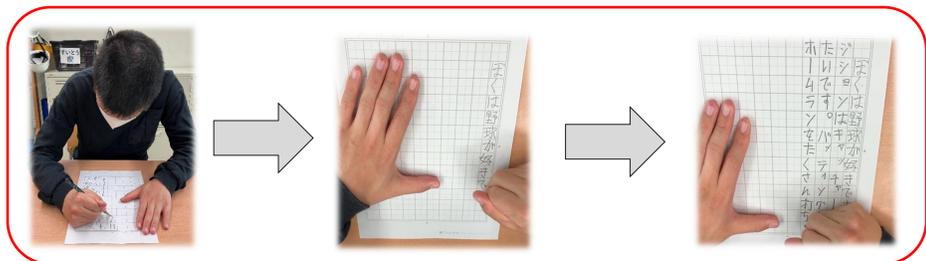
【実践期間】令和7年11月から令和7年12月とした。

【研究対象】筆圧の強弱が著しくみられる本校高等部生徒2名とした。

【倫理的配慮】対象者の保護者には研究の趣旨を説明し、同意を得た。

【実践内容】ひらがな、カタカナ、漢字を含む4種類の原稿用紙を用いた文章の書字をHBの鉛筆で実施する。

※「マスの補助線の有無」や「行幅」の違いが異なる4種類の原稿用紙を使用する。



## III. 結果

筆圧の実態や書きにくさは、対象生徒の特性(筆圧の強弱)や、書き進める時間、使用する用紙の条件によって大きく異なることが明らかとなった。生徒Aの事例では、書き始めは肩から指先まで弛緩した状態で行っていたが、徐々に肩から腕にかけて緊張が高くなるとともに、徐々に筆圧が強くなり文字が色濃く映し出されるようになった。書き終わりの際は筆圧が強すぎるため文字が滲み、それに伴って書字速度も速くなる傾向が見られた。

生徒Bは書字の特徴として、筆圧が弱く文字が薄くかすれてしまい、筆圧を補うために書字の最中に自分が書いた文字をなぞる様子が見られた。書字動作中は何度か体勢を崩す場面があったことから、姿勢の保持が難しく、身体に力が入りづらくなっていた。両者のインタビューでは、文章の記述を行った際の原稿用紙について、「書きにくい」と感じた用紙が対照的な結果となった。「書きにくい」と感じた原稿用紙での書字では、手指に疲労感を感じたことや集中力の低下に結びついたことが共通点として伺えた。

## IV. 考察

本研究では、書字における筆圧の強弱が著しくみられる生徒に対して、筆圧が書字にどのような影響を及ぼし、「書きにくさ」とはどのような姿であるのかを4種類の原稿用紙を用いて実施した。アセスメント結果から対象生徒2名にとっての「書きにくさ」は、身体的な疲労や文字の大きさを用紙に合わせることで挙げられた。このことから知的障害のある子どもの書字における課題は、大きく「**身体機能**」「**教材環境**」が複雑に絡み合っていることが推測される。「身体機能」では、身体の体幹の機能不足が手指への適切な力の伝達を妨げていると考えられ、「教材環境」では、マス目や行幅の大きさと身体的負担の関係は、生徒の身体特性によって大きく異なり、一律の教材設定が必ずしも有効ではないことが考えられる。